

明治中期から昭和の時代まで修猷館と明善の美術家たちが作り上げた「2つの美術山脈」を中心にして掲載した。

(作品はすべて図録より転載)

松本豊太や武田弥一郎が参加した審美会

久留米における洋画界の先駆者として森三美(一八七二—一九一三)がいる。明治二四年(一八九一)久留米高等小学校の図画教員として赴任、坂本繁二郎や青木繁らに洋画の手ほどきをしたことは有名だが、松本豊太も森に学んだ一人である。森の転任後、門下生は洋画研究の継続のため「研美団」を結成するが指導者に恵まれない状態が続き同三九年には研美団を母胎に「審美会」が発足、名誉会員に森、青木、坂本の他、松本らも加わった。そして明善で長く美術教師を務めた武田弥一郎も名誉会員の一人であった。武田の明善での赴任時、青木繁や伊東静尾が学んだ事が判明している。



松本豊太(天の少彦明造35年) 1902 石橋明善画館蔵

しかしながら、一年余りでは休眠状態となり、やがて大正二年(一九一三)に創立される「来日洋画会(のちの来日会)」に引き継がれ、以後、同会において松田諦品らが中心に、久留米画壇をリードすることになる。

《高良大社》は武田が九〇点と採点した、中学二年生の青

青木繁と高島宇朗



青木繁 《高良大社》 明治29年(1896) 個人蔵

高島宇朗(一八七八—一九五四)は近年、高島野十郎の長兄として注目されるようになったが、もともと泉郷と号した詩人として、明善の後輩である青木繁との交友がよく知られていた。特に《海の幸》の取材地となる房州布良を、青木に勧めた逸話は有名である。

宇朗と青木の関係が、高島野十郎にも影響を及ぼしたと考へても不思議はない。しかし、野十郎が、青木の芸術に対して否定的な考へであったと伝える関係者もいる。野十郎にとって、好むと好まないにかかわらず、青木という存在は避けては通れない高い峰であったことは間違いないだろう。

高島野十郎 《蠟燭》 大正



高島野十郎 《蠟燭》 大正 1917-1925 福岡県立美術館蔵

藤森静雄と豊田勝秋 青木に憧れた青春時代

絵の道を志す生徒にとつて、東京美術学校の在校生、卒業生である先輩は、憧れの的であり、特に青木繁という存在は輝ける星であった。帰郷した青木繁の家に通い、親しく教えを受けた藤森静雄は、美校への進学を決意し、やがて創作版画の世界で先駆者となる。

豊田勝秋もまた、青木への思慕を抱いた一人であった。同じ町内で生まれ育ち、幼少の頃、一五歳年長の青木によくかわいがられたのである。その後、来目会にも絵画を出品し、同級生の古賀春江らとともに絵の道に進むことを希望した豊田であったが、親の反対に会い、絵よりは世間とのつながりがあり、父の意に沿う可能性のある造形科へと進んだ。

豊田が絵画の道に進んでいても、優れた画家になつていきたとは想像される。しかし、かれの戦前期の工芸界における活躍ぶりや、更に戦後期の九州の美術界へもたらした多大な功績を顧みれば、豊田の造形科選択は実に大きな意味を後世にもたらしたといえるだろう。

豊田勝秋 《鉢のあひだ》 昭和46年(1971) 福岡県立美術館蔵



故郷を描く 筑後編

筑前に比べ、筑後の画家は郷里の風景や風土を画題にすることが多いように思われる。中でも、筑紫次郎の異名を持つ大河、筑後川は格好の対象であったに違いない。古賀春江《筑後川》は、水天宮のすぐ側あたりの川岸と考へられ、川面には小舟やいかだが浮かんでいる。明善を中退し上京、水彩画家として活躍し始めた二〇歳前頃の古賀が、一時帰郷の際に描いたものであろう。

高島野十郎《筑後川遠望》は満開の桜の奥に、耳納連山から見下ろす筑後川と田園が広がり、さらに遠くに脊振山地を望む、ゆつたりとした春景色である。

また、青木繁《筑後風景》は、場所は特定できないが、盟友の坂本繁二郎が命題した、牧歌的な風情に満ちた滋味ある作品。伊東静尾の《黄櫨》は、蠟を採取するため筑後地域に多く植えられた櫨が紅葉する情景。秋の気配を濃厚に強調した、伊東初期を代表する一点である。

古賀春江と橋橋満帆 《埋葬》と《葬列》をめぐる師弟関係

橋橋満帆は古賀春江回顧展(昭和五〇年、福岡県文化会館)開催にあたり、敬愛の念に満ちた追悼文を寄稿している。橋橋は明善在学中、古賀実家の善福寺に通い親しく絵を教わり、のちに古賀の二科受賞作《埋葬》に感銘を受ける。この油彩画による受賞作は、善福寺の本山である京都の知恩院に所蔵されるが、水彩による本作もほぼ同構図。これに触発された橋橋は《葬列》を描き、古賀

に大いに寝められた。本展出品の《葬列》は当時のものではなく、のちに絵画の発表を久々に再開した橋橋が決意も新たに描いた大作である。おそらく師の古賀を偲びながらこの画題に取り組んだと想像でき、それ以後、橋橋は仏教的な生死にかかわる主題を追い求める。



古賀春江 《埋葬》 大正11年(1922) 福岡県立美術館蔵

二科会 二人のイトウ

明善出身の伊東静尾と修猷館出身の伊藤研之はほぼ同世代で、二科会の福岡市と久留米市におけるリーダーであったが、二人の作風は実に対照的であった。その対比を的確にかつ愛情込めて表現した丸山豊の一文を紹介したい。

「伊藤の抒情には都会性が濃厚で、自然とつねに何がしかの距離をたもつ英知の人間が鮮明である。伊東においては、そもそも画題が土壌であり苦であり、また農家であり農具である。パレットの絵具は華美をおさえて、意識して田園的な淳朴へむかう。伊藤では今日的な人間がすつくと起立しているが、伊東の場合には自然の大きさへ融合をこころみる。伊藤には粋なエスプリがあり、つとめてヨーロッパへ心に向けているが、伊東は牧歌的に東洋への道をたどる。伊藤が福岡市の文化運動の中心人物としてそのたくまぬ社交性を発揮するとき、伊東はむしろ大儒派であり、釣具をたずさえて河畔の

明善芸術中学校 片山攝三の同期生

片山攝三の明善時代の同期生には、美術史、美術評論の第一人者である河北倫明をはじめ、佐賀大学教授や石橋美術館長を歴任した岸田勉、詩人であり美術にも造詣の深い丸山豊がいた。山村秀一が明善の美術教師に赴任し美術の指導が充実した時代、河北は美術部で油彩画を手がけ、岸田も吉村丹鳳の画塾に通い水墨画を描いた。他にも美術や文学への道を選んだ者も少なからずいて、丸山が「明善芸術中学校」と回顧するほど、文芸の香りある中学時代であったと想像される。

静思をたのしむのである。「光る砂、輝く泥」(特別展 イメージの風土学)一九八八年 福岡県立美術館



片山攝三 《丸山豊氏》 昭和63年(1988) 福岡県立美術館蔵

なお、片山は《丸山豊氏》をほぼ最後の作品として長い作家活動に終止符を打った。初の回顧展を福岡県立美術館が開催する前年の撮影であり、交友を重ねた友人の風姿を誠実にとらえたのである。丸山もその友情に応え、回顧展図録に一文を草した。ところが脱稿直後に発売した欧州旅行の途次、アラスカ州アンカレッジで丸山は急逝する。片山による、丸山の穏やかな笑顔は葬儀の遺影となった。

伝統を受け継いで 美術部長 濱 有祐

美術部員、現在15名で活動中です。日常活動は各自、自由に絵画や工作に没頭しています。毎週金曜日には顧問の先生に教授いただいています。9月には筑後地区展出展のため、B-1サイズで清書中です。10月には福岡県大会が開催され、1枚から5枚まで出展できます。そのために厳選された5枚が選ばれます。12月には絵はがきコンクール、デザインコンペが予定され、出展用に計画中です。4月には部員全員で九州国立博物館へゴッホ展鑑賞に出かけました。そして石橋美術館で開催された「青木繁没後100年」展も学年ごとに研修を兼ねて出かけました。青木繁といえば明善を代表する天才画家です。代表作『海の幸』は現在も生徒たちの中で生き続いています。そして神話に基づいて描かれたという『わだつみの



明善高校美術部員

いるこの宮』も彼を代表する作品の一つです。そのあと多くの先輩方が絵画や彫刻で名をあげられています。私たちはその伝統を守り継ぐべく日々研鑽しています。